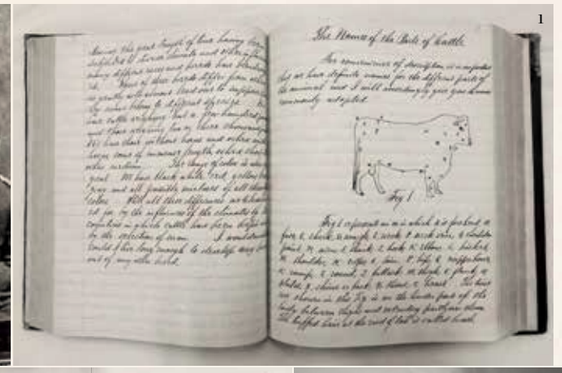
温故知新 北海道大学

挑戦の140年

SCENE-5

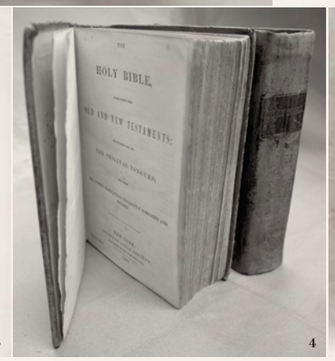
1880-1930

「海外留学」


1

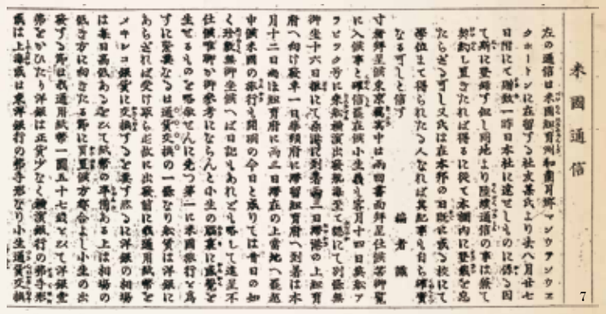
2

3


4

5

6


7

8

9

10

1. 札幌農学校生時代の佐藤昌介の受講ノート（1879年 大学文書館蔵）
2. アメリカ留学中の佐藤昌介（右側）（1886年 大学文書館蔵）
3. 恩師D.P.ペンハロー（大学文書館蔵）
4. 佐藤昌介がW.S.クラークから渡された聖書（大学文書館蔵）
5. ジョンズ・ホプキンス大学に提出した論文（1886年 大学文書館蔵）
6. 札幌農学校校長心得任命の文書（1891年 大学文書館蔵）
7. 佐藤昌介が『大東日報』に掲載した海外渡航記（1882年）
8. 第1期卒業生（佐藤は前列左から3人目）（1880年 大学文書館蔵）
9. 佐藤昌介肖像（1930年代撮影 佐藤ユリ氏提供）
10. 留学時代を回想した「廿五年前迄」（『文武会会報』第65号 1912年）

海外への眼差し

開校から四年を経て、札幌農学校では一八八〇年六月に第一期生が卒業を迎えることとなった。外国人教師から農学・工学・化学といった西洋最先端の学問を学んだ農学校生は、同時にキリスト教や英文学などにも深く接した。西洋の学問・思想・文化に強い感化を受け、海外へと目を見開いていた。第一期生のひとりである佐藤昌介も、早くからアメリカへの留学を志していた。

海外留学への情熱

第一期生の卒業を前にして、教頭心得のD・P・ペンハローは開拓使に対し、佐藤ら三名の海外留学を提案した。特には佐藤については、学問を研究できる身分を与えれば将来的に北海道農業を計画立案して指導する中心人物になり得ると高く評価していた。しかし、留学は叶わなかった。佐藤は開拓使に奉職した後、自ら開拓使に対してアメリカ留学を願い出た。「海外ニ航行シ親シク農事ノ実際ヲ視察シ大ニ利害得失のアル所ヲ研究シ之ヲ平素学ヒ得タル所ニ反省セハ遙ニ万巻ノ書ヲ読ミ空々理論ヲ談スルニ勝ルヘシ」と、アメリカ農業の実際を見聞し、農学校で学んだ農学を研磨したいという希望であったが、聞き届けられなかった。

明治維新後、多くの政府機関が西洋の知識・科学技術を導入しようと多数の官費留学生を欧米に派遣した。しかし、政府高官の子弟が多数派遣されるなど人選が不明瞭で、留学費の管理もずさんであったため、莫大な予算を費やしたにも拘わらず、それに見合う成果は上がらなかった。そのため、文部省が少数精鋭の留学生を人選し、厳格に管理・監督することとなり、札幌農学校卒業生が官費で留学する道は事実上、閉ざされていた。

勇猛果敢な留学スタイル

一八八二年、政府が開拓使を廃止したのを機に、佐藤は官職を辞し、私費によるアメリカ留学を決心した。留学費はおろか家族の生活費にも窮する状況であったが、同郷盛岡の友人や旧開拓使高官などの協力を得て、計画を押し進めた。

佐藤は、一八八二年七月に横浜を出航し、サンフランシスコを経て、八月中旬にニューヨークに着いた。北海道の畜産振興を指導したエドヴィン・ダンの口添えで、ニューヨーク州マウンテンヴィルにあるホートン農場に入った。ホートン農場は民間の農事試験場にあたり、佐藤の恩師であるペンハローが在職したこともあった。ここで一年間、佐藤はバター製造を担当するなど「農事ノ実際」を体験し、農村経済や農民生活状況などを実地に学んだ。

「海外ニ航行シ親シク農事ノ実際ヲ
平素学ヒ得タル所ニ反省セハ
視察シ大ニ利害得失のアル所ヲ研究シ之ヲ
遙ニ万巻ノ書ヲ読ミ空々理論ヲ談スルニ勝ルヘシ」

次の段階として佐藤は、農業経済や農政をより深く学ぶことを志し、ジョンズ・ホプキンス大学（メリーランド州ボルティモア）のフェロー（奨学研究生）に応募した。審査には通らなかったが、提出論文に目を留めた歴史・政治・経済学部のH・B・アダムズ教授に誘われ、一八八三年九月に同大学院に入学した。アダムズ教授から歴史学と政治学を、R・T・イリー講師から経済学を学んだ。アダムズもイリーも後には大家となるが、当時は新進気鋭の若手研究者であった。佐藤は最新の人文科学を学ぶ学問環境を勝ち取ったのである。同年一二月からは日本政府の官費留学生となり、翌一八八四年一二月にはジョンズ・ホプキンス大学のフェローとなった。佐藤はアメリカ土地制度を研究し、一八八六年六月、論文“History of the land question in the United States”でジョンズ・ホプキンス大学から博士号を取得した。

一三〇年前のバックパッカー

佐藤の次の世代以降は基本的な留学システムができあがる。札幌農学校の教員の立場を得て、帰国後の教授昇進を織り込んだ上で数年間、欧米の大学へ官費留学をする。いわゆるエリートの洋行である。しかし、佐藤の場合は違った。職を辞し、バックパッカーさながらに下等船室で海を渡り、農場に住み込んで働いた。目的に適う大学を自身で探し、論文を応募して奨学生の立場を勝ち取った。そして、博士論文を書き上げ、学位を取得した。

一八八六年に帰国した佐藤は札幌農学校教授となり、一八九一年に校長心得に就任して以降、校長・学長・総長として四〇年間にわたり現在に続く北海道大学を牽引し続けた。佐藤昌介を長く北大のトップランナーたらしめたのは、勇猛果敢な留学時代に鍛えた足腰であったと言える。

Hokkaido University HISTORY 1880-1930

1880年 1月 - ペンハローが佐藤昌介らの留学を提案
6月 - 佐藤ら第1期生が卒業、開拓使に奉職
11月 - 開拓使に留学を願い出る
1882年 2月 - 開拓使廃止、三県設置
7月 - 官職を辞し、私費でアメリカへ渡航
8月 - ニューヨーク州ホートン農場に入所
1883年 9月 - ジョンズ・ホプキンス大学に入学
12月 - 官費留学生となる
1884年 12月 - ジョンズ・ホプキンス大学フェローとなる
1885年 6月 - 4ヶ月にわたりドイツへ自費留学
1886年 3月 - 北海道庁設置、北海道庁属となる
6月 - ジョンズ・ホプキンス大学でPh.D.取得
8月 - 帰国
12月 - 札幌農学校教授に就任
1891年 8月 - 札幌農学校校長心得に就任
1894年 4月 - 札幌農学校校長に就任
1907年 9月 - 東北帝国大学農科大学長に就任
1918年 4月 - 北海道帝国大学総長に就任
1930年 12月 - 北海道帝国大学総長辞任

大学文書館 だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives
北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。